

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01696

研究課題名（和文）教学マネジメントの基盤となる大学院生向けプレFDモデルの構築に関する研究

研究課題名（英文）Research on Development of Pre-FD Model for Graduate Students, which is the basis of Educational Management

研究代表者

佐藤 浩章（Sato, Hiroaki）

大阪大学・学際大学院機構・教授

研究者番号：10346695

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、全国調査により日本の大学におけるプレFDの現状と課題が明らかになった。また、各大学がプレFDを実施する際に有用な教材が開発され、試行された。これらの研究成果を踏まえて、全国規模でのモデルプレFDプログラムも試行された。さらに本研究活動を通して、プレFDを実施している国内大学のインフォーマルな担当者同士のネットワークが強化された。本研究により、教学マネジメントの基盤となる大学院生向けプレFDモデルを構築できたことが最大の意義である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教学マネジメントサイクルを機能させるためには、大学教員向けのFD、ならびに大学院生向けのプレFDを恒常的に実施し、教育の担い手の質向上に取り組んでいくことが肝要となる。しかしながら、これまで各大学におけるプレFDの実施状況や使用されている教育方法や教材について、共有されることは少なかった。そのため各大学担当者の負荷も高く、その質が保証されていなかった。本研究では、国内でプレFDを実施する大学のネットワークが構築されると同時に、方法や教材の共有もなされることで、円滑な実施と質保証に向けた取り組みが開始される機会となった。これらは、新たにプレFDに取り組む大学にとっても有益な成果である。

研究成果の概要（英文）：This study conducted a nationwide survey to clarify the current state and issues of Preparing Future Faculty Program at Japanese universities. In addition, useful teaching materials were developed and tested when each university implements PFFP. Based on these research findings, a model PFFP was also tested on a nationwide scale. Furthermore, through this research activity, an informal network of domestic universities that implement PFFP among academics was strengthened. The greatest significance of this research is that it succeeded in building a PFFP model for graduate students that can serve as the foundation for educational management.

研究分野：高等教育開発

キーワード：プレFD 教学マネジメント 大学院生 教育能力開発

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、日本の大学では教育の質保証が最重要課題となっているが、その背景には、教学マネジメントの脆弱さが存在していると言われている。2018年に出された中央教育審議会答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」では、全学的な教学マネジメントが不十分であることが指摘された。教学マネジメントとは、授業、カリキュラム・プログラム、組織の各レベルにおいて、教育・学習に関わるPDCAサイクルを回して質保証を行うことであり、このサイクルがうまく回っていないのではないかと提起されている。一方で、こうしたサイクルを機能させるためには、教学マネジメントを担うに相応しい組織設計と、それを構成する教職員の質の確保が前提となる。とりわけ日々の授業を教えている教員が高い教育能力を有していることが不可欠である。大学教員の教育能力の向上に関して言えば、1999年に大学設置基準においてFD(ファカルティ・ディベロップメント)が努力義務化され、2008年には義務化された。しかしながら、一度、職に就いた教員が体系的な研修を受講することは、時間の確保という点でも参加動機という点からも難しく、実質的に教育能力が保証されているとは言い難いのが現状である。

一方、大学院生を対象とした教育能力育成プログラムは、日本ではプレFDと呼ばれ、研究大学を中心に2000年代以降展開されている(今野2016)。内容の違いはあるものの、概ね授業設計、教育方法、評価方法について体系的に学ぶという共通点がある。就職後の教員に対して行う研修に比較すると、授業として体系的な学習を提供することができる、単位を提供することから十分な学修時間を確保することができる、就職を控えているため高い参加動機を持たせることができるといったメリットがある。また、近年、大学における実務家教員の割合が増加していることに伴い、実務家教員に向けての研修も求められており、プレFDプログラムと共通する内容も多いことから、共有化することが可能になると考えられる。

これまで各大学の自主的な取り組みとして展開してきた日本のプレFDであるが、2019年に出された中央教育審議会答申「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿」を踏まえて、同年、大学設置基準において、博士後期課程のプレFD実施又は情報提供が努力義務化された。こうした法令上の根拠に基づき、今後博士後期課程を擁する大学がプレFDに取り組んでいくことが予測される。別言すれば、全国レベルで新たな大学教員養成課程が誕生したと考えることもできるだろう。

しかしながら、各大学で行われているプレFDの実施母体は全国組織が存在しているわけではなく、その内容も調整されているわけではない。また、学術的な視点から言えば、プレFDに関する先行研究は事例報告にとどまることが多く、質の高いプレFDの実施のためにはどのような要素がどのように構成されればよいのか、そしてどのような手法を使えば効果があがるのかということについては、明らかにされていない。

このような背景から、「教学マネジメントの基盤となる大学院生向けプレFDモデルを構築するための要素と手法は何か」を本研究課題の核心をなす学術的な問いとした。この問いを解決してプレFDモデルを構築できれば、大学の教学マネジメントを支える力量を十分に備えた、新たな大学教員養成システムの全国展開に貢献することができると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教学マネジメントの基盤となる大学院生向けプレFDモデルを構築することである。その目的を達成するために、必要となる要素と手法を明らかにすることを目指して、下

記の3点について研究を行う計画を立てた。

- (1) 国内、海外の現状を把握するためのプレ FD に関する文献・質問紙・訪問調査の実施
- (2) 大学院生の教育能力を育成するためのプレ FD プログラムの開発
 - (2-1) プレ FD プログラム に関するカリキュラム設計、授業案、教材の開発
 - (2-2) 実践結果に基づいたカリキュラム・教材の評価
- (3)(1)(2)の結果に基づいた、大学院生向けプレ FD モデルの構築

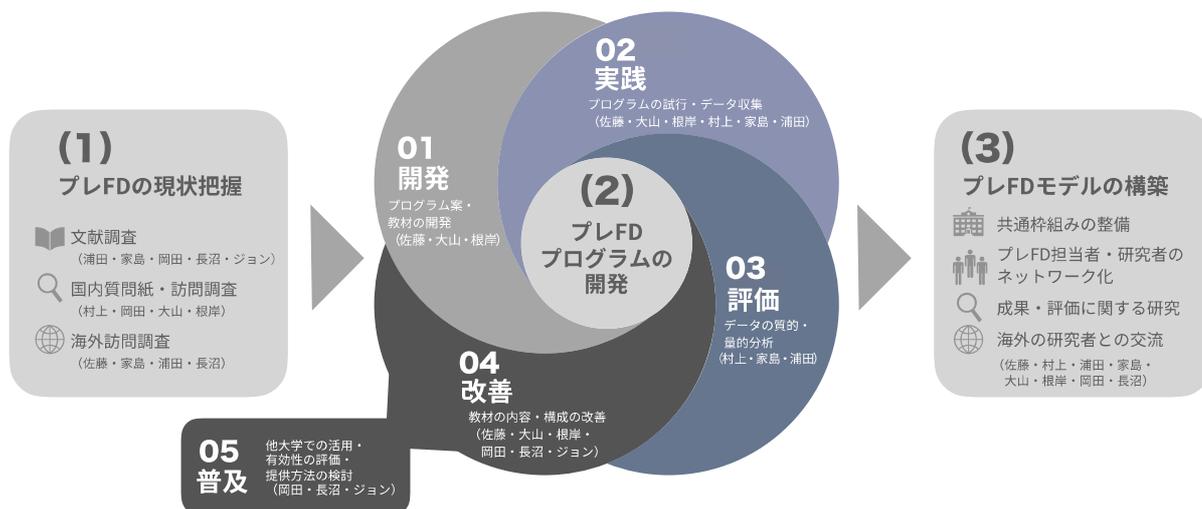
本研究課題は、大学院生を対象として教育能力を育成するためのプレ FD プログラムを開発し、実際に実践、評価を行って改善するプロセスを有している点、プレ FD 担当者をネットワーク化してプレ FD プログラムの開発・共有や人的資源の効率的な活用方法に関わる研究を進めていく点に学術的独自性がある。これらを実現することによって、大学における教学マネジメントを担うに相応しい人材育成や組織設計を目指した。

また、人的資源の不足や大学院生数の不足などにより、プレ FD の実施が困難な大学へのプレ FD プログラムの提供や ICT などによるオープン化を実施する点、プレ FD プログラムの互換性に基づくナショナルレベルでのプレ FD モデルを構築する点において創造性がある。博士後期課程のプレ FD 実施又は情報提供が努力義務化される中、日本におけるプレ FD モデルを構築するとともに、海外との研究・実施拠点となりうる研究課題であると自負している。

本研究課題を遂行することを通して、全国的なプレ FD 担当者コミュニティを構築し、大学の教学マネジメントを担う力量を十分に備えた大学教員を養成するシステムの全国展開に貢献することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者、研究分担者7名を(2)であげた3つの研究課題について下図のように担当をわりあてた上で、それぞれの研究課題において情報共有、協力しながら、研究を遂行した。



4. 研究成果

- (1) 国内、海外の現状を把握するためのプレ FD に関する文献・質問紙・訪問調査の実施
2020年3月に発生した世界的な新型コロナウイルスの流行のため、計画されていた2020年度、

2021 年度に海外大学への訪問調査や学会での情報収集・発信は実施できなかった。2022 年度（2023 年 3 月）には、エジンバラ大学を訪問し、コロナ禍における博士学生・ポスドク・若手研究者のオンライン能力開発について情報収集を行った。また、2022 年 6 月にはデンマーク・オーフスで開催された International Consortium for Educational Development Conference2022 に参加し、諸外国のプレ FD の現状について情報収集すると同時に、大阪大学におけるプレ FD について発表し、フィードバックを得た。

さらに、プレ FD の実施に関する現状と課題を明らかにし、大学間の情報共有や連携につながる示唆を得ることを目的として、博士後期課程を有する全国の大学を対象に量的な調査を行い、112 大学から有効回答を得た。その結果、プレ FD 実施大学では、FD 担当組織の教員が担当するケースが多く、内容も FD と重なりが大きいこと、TA などの研修の一環として実施しているケースも多いことなどが明らかになった。プレ FD の全国展開については、提供側が人的リソースを担保できるような施策や提供するメリットを感じられるような施策を行う必要性が示唆された。プレ FD 非実施大学については今後も実施予定のない大学が多かったが、今後実施する予定の大学も一定数存在した。実施予定のない大学では検討したことがないだけでなく、大学教員を目指す学生の少なさなども理由として挙げられていた。またプレ FD に関する情報提供の際の課題とニーズとして、情報を集約して提供できるしくみを検討していくことや参加者が参加しやすいオンラインプログラムを増やしていくことの必要性が示唆された。

また、大学院生のプレ FD プログラム参加者と非参加者の教育能力の自己認識に対する差異を分析し、プログラムとの関係を探ることを目的として、全国の大学院生と博士研究員を対象にウェブアンケート調査を実施した。その結果、プレ FD 参加者群と非参加者群との間で、大学教員に求められる教育能力や教師効力感に対する自己認識において有意な差が認められた。

(2) 大学院生の教育能力を育成するためのプレ FD プログラムの開発

(2-1) プレ FD プログラム に関するカリキュラム設計、授業案、教材の開発

(2-2) 実践結果に基づいたカリキュラム・教材の評価

従来のプレ FD は、大学における授業デザインを初めて学ぶ「初学者」を対象としていた。そのため、基本的な模擬授業の実施はできても、より発展的な内容として、例えばジグソー法に関して体系的に学び、個々の学習者が模擬授業内で実演する機会は極めて限定的であった。そこで、異なる大学に所属する大学教員 3 名（長沼，大山，根岸）が協力して教材の開発を行い、今回の課題研究内でブレンド型の新しいプレ FD プログラム開発した。このプログラムは、授業デザインの「中級者（従来のプレ FD 修了者）」を対象としており、「オンライン授業」「ファシリテーション」「転移」「ジグソー法」「形成的評価とフィードバック」「英語で教える」などのより専門的な内容に関して学習する機会を用意した。

2022 年に九州大学で 1 単位 8 コマの授業「大学の授業を彩る」として実施し、学生 5 名が参加、修了生が 3 名聴講した（オンライン参加含む）。最終評価対象となる模擬授業では、新規プログラムの学習内容を十分に活かすことを受講生は求められた。その結果、反転授業とジグソー法を組み合わせた学習方法を受講生自身が開発するなど、授業デザインのスキルの大きな向上が見られた。本科目で開発された教材、および、2020 年から実施されてきた九州大学の従来のプレ FD「大学の授業をデザインする」の教材は、2024 年度中に併せてオンライン上にて一般公開し、プレ FD の開講が困難な大学へと提供する予定である。

(3)(1)(2) の結果に基づいた、大学院生向けプレ FD モデルの構築

こうした基礎調査や教材開発を踏まえて、2023年11月5日に「大学院生のためのアカデミック・キャリア・ワークショップ」をオンラインにて実施した。ワークショップは全5時間で、参加者同士での研究紹介、アカデミック・キャリアに関するレクチャー、アカデミック・ライフヒストリーグラフの作成（山田 2004 を改変）、アカデミック・コア&ゴールの設計（Yoshida and Kurita 2016, 大山ら 2021 を改変）の4つのコンテンツで構成された。

大学院生に加えて、大学院進学を検討する学部生も参加対象とした。当日参加者は9名（申込者19名・キャンセル率53%）であり、属性は、学部生5名、修士課程1名、博士課程3名であった。アンケートの結果を表1に示す。5件法による評価（とても良かった～全く良くなかった）では、各コンテンツとワークショップ全体で高い評価が得られた。

自由記述からは、短時間で研究の魅力を伝える必要性の認識、大学院生や大学教員に関する現状理解、過去・現在・未来の活動に対する省察の重要性、大学教員の活動における「統合」や研究と教育のバランスへの関心、自身の活動を言語化し他者に説明することの難しさの認識などの効果が確認された。ここから、プレFDを大学教員としての教育能力開発のみならず、大学教員志望者以外も対象とするアカデミック・キャリア開発として広義に捉えることで、多面的な効果を有する活動として位置づけられる可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 岡田有司・近藤伸彦	4. 巻 45(1)
2. 論文標題 アセスメントプランの導入と大学教育の課題：開催校シンポジウム企画趣旨	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Urata Yu, Shimai Satoshi, Schnell Tatjana	4. 巻 32
2. 論文標題 日本語版モジュール式仕事の意味尺度（ME-Work）の開発	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Personality	6. 最初と最後の頁 134～137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2132/personality.32.3.6	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浦田 悠、根岸 千悠、野瀬 由季子	4. 巻 12
2. 論文標題 コロナ禍における大阪大学の実践事例からみる緊急遠隔授業の工夫と課題	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 33～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/94843	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浦田 悠	4. 巻 45
2. 論文標題 学習スペースの評価システム（LSRS）拡張版の開発	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 100-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野瀬由季子・大山牧子・大谷晋也	4. 巻 183
2. 論文標題 授業観察を用いた教師研修の設計と評価 立場の異なる日本語教師間での協働の促進	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 50-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉美保子・石井和也・浦田 悠・多田泰紘	4. 巻 44(2)
2. 論文標題 ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインを考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 173-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上 正行、佐藤 浩章、大山 牧子、権藤 千恵、浦田 悠、根岸 千悠、浦西 友樹、竹村 治雄	4. 巻 37
2. 論文標題 大阪大学におけるメディア授業実施に関する全学的な支援体制の整備と新入生支援の取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育システム情報学会誌	6. 最初と最後の頁 276～285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14926/jsise.37.276	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤浩章	4. 巻 48
2. 論文標題 ポスト・コロナ時代の大学教員とFD : コロナが加速させたその変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Banda, K., Ieshima, A., & Otsuka, K.	4. 巻 9(1)
2. 論文標題 Career Development Style of Japanese University Students: A comparison of universities with different levels of admission difficulty.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Indian Journal of Career and Livelihood Planning	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 島井哲志・宇恵 弘・浦田 悠	4. 巻 12
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症による授業計画変更下でのアクティブラーニング型授業の実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合福祉科学学会誌	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鄭漢模・長沼祥太郎・野瀬健・丸野俊一	4. 巻 7
2. 論文標題 九州大学におけるティーチング・アシスタント制度改革 : 1 年間の記録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 基幹教育紀要	6. 最初と最後の頁 189-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4363544	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上史子・大山牧子・川越明日香・安岡高志	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 SoTLに取り組む 個人, 組織の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 88-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田有司	4. 巻 20
2. 論文標題 オンライン授業アンケート集計結果報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 クロスロード(東京都立大学FD委員会年間報告書)	6. 最初と最後の頁 16-18, 44-60
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計25件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 瀬崎颯斗・正司豪・明石寛太・佐藤浩章
2. 発表標題 アカデミック・キャリア支援を目的とした全国版プレFDワークショップの開発と試行
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 根岸千悠・岡田有司・渡邊文枝・金賢眞・村上正行
2. 発表標題 大学院生を対象とした教授能力開発に関するアンケート調査
3. 学会等名 大学教育学会 第45回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 近田政博, 加藤真紀, 栗田佳代子, 佐藤浩章, 根岸千悠
2. 発表標題 プレFD再検証: 研究大学の教育系センターにおける運営上の課題と試行錯誤
3. 学会等名 大学教育学会 第45回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 根岸千悠, 岡田有司, 渡邊文枝, 金賢眞, 浦田悠, 村上正行
2. 発表標題 ブレFD参加者と非参加者の教育能力に対する自己認識
3. 学会等名 日本教育工学会 2024年春季全国大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森玲奈, 根岸千悠, 村上正行
2. 発表標題 博士課程在籍者の研究活動に関する探索的研究
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 やまたようこ, 浦田悠, 横山草介, 土元哲平, 木戸彩恵
2. 発表標題 人生のイメージ地図 ビジュアルナラティブの探究
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大山牧子・畑野快
2. 発表標題 アクティブラーニングにおけるリフレクション内容の特徴
3. 学会等名 日本教育工学会2022年秋季全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浦田 悠・多田泰紘
2. 発表標題 学習スペースの評価システム (LSRS) 第3版日本語版の作成およびラーニング・commonsの評価への活用の試み
3. 学会等名 日本教育工学会2022年秋季全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川島大輔・河野由美・近藤恵・田中美帆・渡邊照美・浦田悠・古賀佳樹
2. 発表標題 死生心理学をいかに教えるか 大学での死生学教育の実践を通じた対話
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山田礼子・塚原修一・濱名篤・村上正行・浦田 悠・多田泰紘・溝上慎一
2. 発表標題 コロナ禍がもたらす大学教育の可能性 対象・方法・内容
3. 学会等名 大学教育学会2022年度課題研究集会課題研究シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 千葉美保子・石井和也・浦田悠・多田泰紘
2. 発表標題 ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインを考える
3. 学会等名 大学教育学会第44回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田有司
2. 発表標題 大学教育現場と心理学：政策と現場のはざままで
3. 学会等名 心理科学研究会2022秋の研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金 賢真, 大山 牧子, 田尾 俊輔, 根岸 千悠
2. 発表標題 ブレFDにおける大学院生の「教育の抱負」の記述内容：階層的クラスタによる特徴の抽出
3. 学会等名 日本教育工学会研究会2022(2)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊 文枝, 岡田 有司, 根岸 千悠, 村上 正行
2. 発表標題 博士課程を有する大学院を対象としたブレFDに関する調査
3. 学会等名 日本教育工学会 2022年秋季全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroaki Sato, Makiko Oyama and Chiharu Negishi
2. 発表標題 Structured Future Faculty Program for Graduate Students
3. 学会等名 The International Consortium for Educational Development, International Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浦田 悠・根岸千悠・佐藤浩章・村上正行
2. 発表標題 オンライン授業実践ガイドの開発
3. 学会等名 日本教育工学会2020年秋季全国大会（第37回）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村上 正行・佐藤 浩章・浦田 悠・根岸 千悠
2. 発表標題 大阪大学におけるオンライン授業に関するFDの実践と評価
3. 学会等名 日本教育工学会2020年秋季全国大会（第37回）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤浩章・根岸千悠・杉田郁代・井上史子
2. 発表標題 オンライン教材を活用した教員研修の内製化
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤浩章・近田政博・杉田郁代・浦田悠
2. 発表標題 ストーリーテリング手法を使った動画FD教材の開発とその活用方法 関西地区FD連絡協議会「大学の授業を極める」シリーズを事例に
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 権藤千恵・大山牧子・中村征樹・北沢美帆・佐藤浩章
2. 発表標題 オンライン教育コンテンツによる新入生の学び支援 - 阪大ウェルカムチャンネルでの取り組みを通じて -
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤浩章
2. 発表標題 実務家教員と研究者教員の境界線はどこにあるのか？
3. 学会等名 日本実務教育学会設立記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根岸 千悠・佐藤 浩章
2. 発表標題 大阪大学におけるFD セミナーのオンライン化の特徴と課題
3. 学会等名 日本教育工学会2020年秋季全国大会（第37回大会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 根岸 千悠
2. 発表標題 大学教員の卓越性に関する大学生の認識 初年次科目の受講生を対象に
3. 学会等名 日本教師教育学会第30回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大山牧子・岩居弘樹
2. 発表標題 大学教育における教員の経験に着目したリフレクションの変容
3. 学会等名 日本教育工学会2021年春季全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大山牧子・畑野快
2. 発表標題 大学生を対象としたアクティブ・ラーニングリフレクション尺度の試み
3. 学会等名 日本教育工学会2020年秋季全国大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 佐藤 浩章	4. 発行年 2023年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 232
3. 書名 大学教員の能力開発研究	

1. 著者名 日本教育工学会、村上 正行、田口 真奈	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 教育工学における大学教育研究	

1. 著者名 佐藤 浩章、栗田 佳代子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 216
3. 書名 授業改善	

1. 著者名 佐藤 浩章	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 128
3. 書名 高校教員のための探究学習入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	家島 明彦 (Ieshima Akihiko) (00548357)	大阪大学・キャリアセンター・准教授 (14401)	
研究分担者	岡田 有司 (Yuji Okada) (10584071)	東京都立大学・大学教育センター・准教授 (22604)	
研究分担者	村上 正行 (Masayuki Murakami) (30351258)	大阪大学・全学教育推進機構・教授 (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長沼 祥太郎 (Shotaro Naganuma) (40826096)	九州大学・未来人材育成機構・講師 (17102)	
研究分担者	渡邊 文枝 (Fumie Watanabe) (50749075)	早稲田大学・データ科学センター・講師（任期付） (32689)	
研究分担者	根岸 千悠 (Chiharu Negishi) (60726610)	京都外国語大学・共通教育機構・講師 (34302)	
研究分担者	大山 牧子 (Makiko Oyama) (70748730)	神戸大学・大学教育研究センター・准教授 (14501)	
研究分担者	浦田 悠 (Yu Urata) (90553834)	大阪大学・全学教育推進機構・准教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関